

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第40号 2024年4月30日 発行

目次

*「まち歩きマップ」から回遊の楽しい町中津へ (山内慶太)……………	2・3	*チケットから見る学生野球史(酒井俊輔)……………	8
*中津城下絵図とまち歩きマップ(松岡李奈)……	4・5	*新収資料紹介……………	9
*近代日本医学の黎明期を支えた先人たちの志を知る (森孝之)……………	6・7	*主な動き……………	10
		*センター諸記録(2023年10月～2024年3月)……………	11
		*スタッフ一覧……………	12

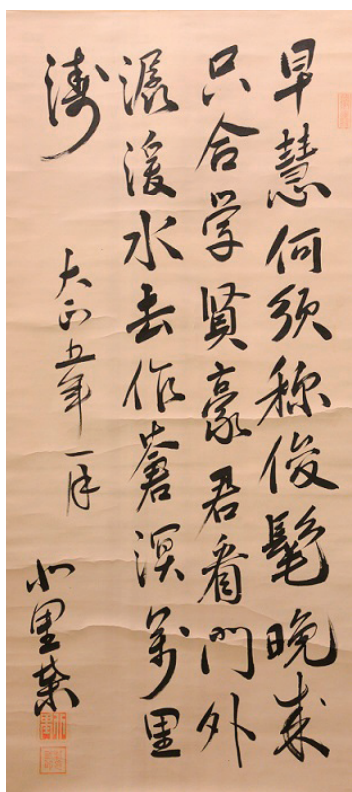
北里柴三郎漢詩「医道論」

大正5年(1916)1月

北里柴三郎(1853-1931)が、東京医学校時代の明治11年(1878)に草した原稿「医道論」の末尾に記した漢詩を、後年大書した書。北里の書は非常に少なく珍しい。当センターが所蔵する唯一の北里の書である。この書の年に医学部は設置認可が下り、翌年開校した。

内容は、生来の性質に甘えずに晩成を期して努力する大切さを詠んでいる。原稿「医道論」では、病の治療ではなく、予防こそが医の本質であるとする「予防医学」の考えが表明されており、この考え方は、以後北里の生涯を貫いている。

ドイツで世界的研究成果を挙げながら、帰国後に冷遇された北里に支援の手を差し伸べたのが福沢諭吉で、北里はその恩義から、福沢没後の慶應義塾大学医学部・病院の創設に自らの門下生を率いて参加した。北里は後年、「予は福沢先生の門下生ではないが、先生の恩義を被ったことは門下生以上である」と語っている。
(都倉)



早慧何須称俊髦
晚成只合学賢豪
君看門外潺湲水
去作蒼溟万里涛

大正五年一月
北里柴

(大意)
幼時から賢いからといって、どうして立派な人物になれようか。晩成を期して、ともに、賢者豪者学ぶのみ。君には見えないか、門前の小さな水流も、やがて大海原の万里の波濤となるのを。



【北里柴三郎肖像】



「まち歩きマップ」から 回遊の楽しい町中津へ

福沢研究センター所員
常任理事

山内 慶太

2024年4月27日、「まち歩きマップー福沢諭吉が生きた幕末の中津を歩こう！」の完成記念イベントが開かれた。不滅の福沢プロジェクト推進委員や観光ガイド諸氏等の関係者が多数参加し、私と中津市歴史博物館学芸員の松岡李奈氏が案内役となって、まち歩きマップを使いながら、歴史散歩を行った。

中津市では、紙幣の肖像が替わるにあたり、2021年11月から中津市（観光推進課）、中津市教育委員会、福沢旧邸保存会事務局の三者が事務局となって「不滅の福沢プロジェクト」を行っている。その目的は、「福沢諭吉先生の故郷“中津”を全国に発信することで中津市民のシビックプライドを醸成し、先生の思想を後世に語り継ぐ契機とする」、「福沢諭吉先生を中心としたネットワークを構築することで、故郷の偉人「福沢諭吉」を末永く後世に伝える基盤を構築する」等で、様々な取り組みが行われている。慶應義塾もこれに協力しており、地域連携担当の常任理事岡田英史氏と私が委員として参加している。「まち歩きマップ」もその一環である。

河北先生とのまち歩き

中津は空襲の被害を受けなかったので、福沢先生が過ごした時代の地図で歩くことができる。城下町のエリアは、道筋も道幅もほとんど変わっていないため、『福翁自伝』に書かれた少年時代のエピソードの情景を想像しながら歩くことができるのである。また、蘭学（村上及び大江医家史料館）、近世・近代産業と物流の歴史（むろや醤油、旧宇野屋、豊後街道地区、運上場等）、河童伝説（円應寺・自性寺の河童の墓）、九州最古の近世城郭、等、多様な側面から興味を膨らますこともできる。勿論、古い町並みの残っている城下町は他にもあるが、明治以降も産業が盛んに発展した都市としては貴重であろう。

私が中津のまち歩きの面白さを知ったのは、昭和61年3月のことであった。紙幣に福沢先生の肖像が使われるようになって間もない時期で、今はダイハツ等の自動車産業の拠点となっている埋立地で「豊の国テクノピア中津大博覧会」が開催され、合わせて旧邸の福沢記念館の展示も整え直すことになった。それに福沢研究センターが協力し、所員の河北展夫氏（文学部教授）と佐志傳氏（高等学校教諭）、職員の中森東洋氏を中心となって担った。それに、学生アルバイトとして大学1年生の私と大久保忠宗君（現普通部教諭）が加わったのであった。

約1週間弱の滞在の間、作業の合間には、何日もかけて河北先生に中津の町を細かく案内して頂いた。河北先生はその時中津に20数回目とのことで中津藩の歴史に最も詳しく、佐志先生が聞き手となって、色々な話を引き出して下さった。また、歩いていると中津の郷土史家

の島通夫氏とも遭遇、お話を聞くこともできた。私はその楽しさが忘れられず、その時の感覚を忘れないようにと、以来、学会等で九州に出張した時には極力中津に立ち寄って当時のメモを片手に1～2日かけて歩きまわるようにして来た。

塾生とのまち歩きと焦燥感

塾の教員になってからは、幼稚舎が夏休みに6年生希望者を集めて行っている大阪・中津・長崎旅行の第1回目の案内役をした。また、近年では、学生総合センター主催の大学生を対象とした史跡巡り、福沢研究センター主催の高校生・大学生対象のプログラム等で中津を案内する機会に恵まれて来た。

これらの経験からも、小学生から大学生、社会人の大学院生に至るまで、どの年代にも、福沢先生の時代の地図でまち歩きができるという体験は貴重で面白いものであること、そしてまた、福沢先生への理解を深めるきっかけとしても貴重であることを実感して来た。一方で、中津を訪ねる度に、当時の情景を思い浮かべるのに不可欠な幕末期から明治期頃に建てられた家屋が壊されていくことに焦燥感を強めていた。

各道に古い建物が少しずつでも残っていればタイムスリップできる楽しさは増すが、それが全く無くなってしまくと、塾生と共に行く必要性も減ってしまう。貴重な教材であり歴史遺産でもある城下町としての雰囲気をもどくように保存するかは喫緊の課題となっていた。

一方で、中津市も近年は、教育委員会を中心に福沢先生並びに中津の歴史についての取り組みが活発になって来ていた。例えば、中学生向けの『なかつ学びんびくジュニア諭吉検定公式ガイドブック』、小学校社会科学習教材の『なかつ学びんびく子ども中津検定公式ガイドブック』を制作し、2020年より市内の各校で活用している。

インフラとしてのまち歩きマップ

これまで私は、中津のまち歩きを案内する時には、今永正樹氏による「豊前中津城下絵図」を用いていた。しかし、色刷りで、より福沢先生と関係する人々のつながりが見える地図になるともっと面白いし、スマートフォンのアプリになって、再生古地図の上に現在地が表示されるようになればなお面白いと考えていた。本号で松岡氏が説明しているように、不滅の福沢プロジェクトの一つとしてそれが制作されたことは特筆すべきことであろう。

しかし、これで完成ではない。まち歩きマップは、中津の城下町エリアの回遊を楽しむためのインフラであって、これから大切である。そのことを筆者は、2023年2月15日の不滅の福沢プロジェクト推進委員会において「回

遊できる町になる為の諸課題—まち歩きマップを活かして—と題して説明した。以下にその概要を紹介したい。

中津は、これまで観光客には、「福沢旧居と中津城以外に見所が無い」と思われて来た。また、もっと歩き回ろうとすると、途中で休憩する場所が殆どなく、冬や夏は辛いということもあった。その結果、回遊しない町・できない町となっていた。それでは、宿泊する旅行客も増えないし、お金も地元に残らないということになる。

これを、①まち歩きマップの充実、②町並みの保全・魅力創出、③休憩できる店・休憩所の整備など歴史散歩の環境を整えることができれば、インバウンド、修学旅行も含め宿泊する観光客も増え、観光収入の増大にもつながるということになる。そうやってこそ、今回のプロジェクトは、一過性のものでなく、その成果が将来的に広がっていくものとなるのである。

上記の①～③のうち、②の町並み保全・魅力創出は喫緊の課題である。何よりもマイナス要因としてあるのが「危険空家等除却（解体・撤去）事業補助」である。つまり古い建物は壊すことにお金が出るようになってからここ数年で急速に解体が加速している印象がある。このことは回遊できる町としての魅力の低下につながってしまう。

写真は、2020年2月に偶々解体作業に遭遇して撮った写真である。桜町・豊後町の四辻のそばの元薬店である。

立派な梁、土間を通り抜けた先に庭があること、屋根と下野の間隔が狭いことなど、典型的な構造であった。

これが解体によって以下のように景観が変わってしまった。勿論、生活している人への配慮が必要であるが、空き地になったまま使用されていないのであれば、回遊できる町づくりに生かせなかったのかとつい考えるのである。



2016年8月



2021年11月

町並みの魅力創出には、商家が並んで反映した様子を思い起せる特徴的な道沿い（諸町、豊後町）は、三軒続きと向かいの一軒のかたまりを意識して残せると、いわゆるインスタ映えもして視覚的にも人を呼び寄せることが出来る。また、金谷の武家屋敷の一带も塀を残せると同様である。また、他の道沿いも、どの通りもせめて点でも古くからの建物を残せると、回遊する同線上の魅力を増すことが出来る。ちなみに、次の写真は、豊後町で

撮ったものである。

一方で、町並み保全のプラス要因もある。それは全国的に古民家ブームがあり、飲食店や宿泊施設、シェアオフィス等での活用事例が増えていることである。



中津でも、京町に2017年開店のHalu Chocolate、諸町に2022年開店のすえひろや（外国人サイクリストに人気の宿）などが出来て成功している。古民家の飲食店や宿泊施設等としての活用を進めることは、町並みの保全と共に回遊中に立ち寄れる場が増えることになり大切である。

回遊の楽しい町へ

城下町の町並みを保全し魅力を高めていくためには、自治体の文化財等の保護を担当する教育委員会、観光企画部、まちづくり推進課の密な連携が大切となる。この点では、2022年11月「おおいた教育の日」推進大会で記念講演をした翌日に、教育長であった栗田英代氏の発案で教育委員会と観光課の諸氏と一緒に一日がかりでまち歩きをして以来、中津のまち歩きの面白さと問題意識の共有が進んだ印象を受ける、今年春には、3つの部局の諸氏と一緒に歩き回る機会もあった。

また、心強いのは奥塚正典市長がこの問題に熱心であることで、今年春からは既存の建物を活用した宿泊施設や飲食店等の新規出店経費を補助する「城下町まち並み保全・魅力創出事業補助金」がはじまった。つまり、古い建物を残す方に補助金が出るようになったのである。

壊れつつあるまち並みを見ていると、中津が、城下町エリアを散策しながら福沢先生の少年時代を追体験できる町であり続ける為には、この機会を大切にしたいものだと切に思う。

近年、歴史的町並みを保全しながらホテル・飲食店等に活用し、外国人も含めた観光客を集めることに成功している事例も各地で増えてきている。このような成功事例を分析してビジネスモデルを取り込むと共に、解体を考えている所有者と古民家を活用する業者のマッチングの展開等が中津市には期待されるところである。

他方で、中津市歴史博物館には、中津のまち並みを、城郭の造りだけでなく、近世の産業史・文化史・学問史の側面等からも面白く語れる題材を発掘・収集すること、福沢研究センターには、中津における福沢先生と周囲の人々のエピソードを集め、わかりやすく活用できる形にすること、等が求められよう。

これらがうまく重なり合ってはじめて、中津が歴史遺産、教育資源、観光資源として充実したものとなるのである。約40年前、河北先生が、今残す努力をしないと勿体ないと歩きながら何度も何度もお話しになっていたことをいつも思い出すのである。



中津城下絵図とまち歩きマップ

中津市歴史博物館学芸員 松岡 李奈
福沢研究センター客員所員

令和6年4月、中津市は「まち歩きマップー福沢諭吉が生きた幕末の中津を歩こう!」を公開した。このマップは中津市歴史博物館所蔵の「中津城下絵図」(市指定有形文化財)をもとに作成した再生古地図で、紙版とWEB公開を行なっている。WEB版ではスマートフォンの位置情報を利用し、再生古地図上に現在位置を表示することが可能である。マップ上には史跡情報や古写真を掲載しており、中津の町並みを歩きながら福沢に関連する史跡や関連人物を確認することができる。また周遊ルートもあり、「諭吉と歩く中津コース」「中津周遊コース」「お気軽散策コース」の3つのコースが掲載されている。それぞれ史跡や飲食店を巡るようコース設定を行ったが、「諭吉と歩く中津コース」は丸一日かけて中津城下を歩くため、歩きやすい靴を推奨する。



【町歩きマップルート案内面】

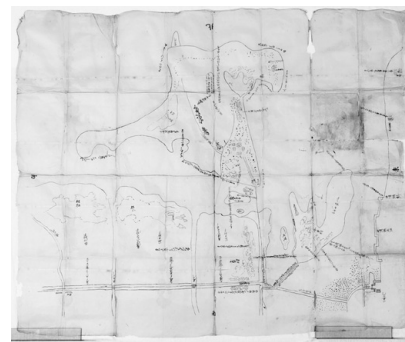


【デジタル版マップ
QRコード】

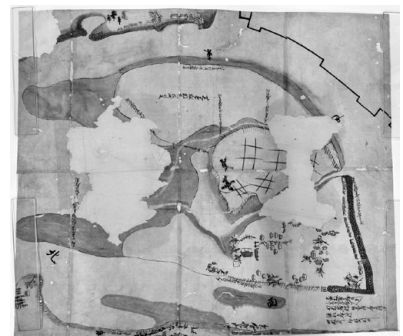
中津城は大分県と福岡県の県境である山国川支流の中津川河口沿いに位置している。天正15(1587)年、黒田孝高が豊前6郡の領主として入部し、中津城を築城した。その後、細川忠興が領主となり、

中津城下町を形成した。中津は空襲の被害がなかったため、この細川期に作られた城下町の構造をよく残しており、町割りや道筋等が変わらないため、江戸時代の絵図でも現在の町を歩くことができる。今回の再生古地図は福沢諭吉が生きた時代がテーマのため、幕末から明治期に時代を設定し、城下外の水路や地形については、村絵図や古表宮絵図を参考とした。特に山国川にある小祝(子祝)地域は、寛文9(1669)年の山国川洪水による流路変化によってできた三角州に位置する集落であるため、江戸期を通して地形や掛橋が変容した。そのため、中津市歴史博物館で調査を進めている渡辺家資料(山国

川対岸の古表宮神官を務めた)や中津市立小幡記念図書館旧蔵の複数の絵図を参照し、作成した。小祝は、江戸後期より船運で栄えた中津藩・小倉藩の領地の争いが起きる用地であり、幕末になると幕長戦争など海防の拠点であった。

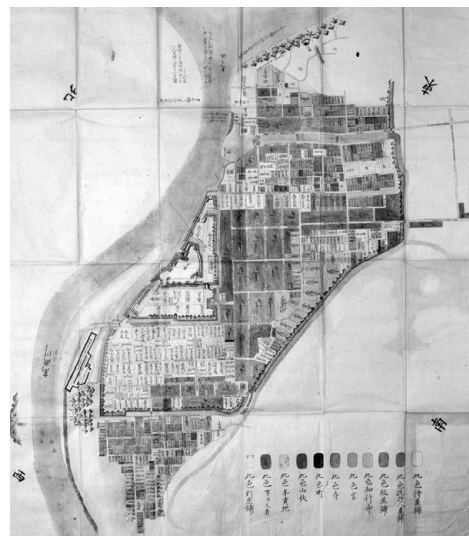


【古表宮絵図】



【小幡記念図書館
旧蔵小祝絵図】

基本資料となった「中津城下絵図」は作成年が不詳である。



【中津城下絵図】

しかし、福沢三之助の名前が記載されていること、現存する福沢旧居（福沢の母・順の実家である橋本家住居であった）位置に順の父・橋本浜右衛門の名前があることから、福沢の父・百助没後の天保中期から福沢家が橋本家住居を買い取った嘉永年間ごろの制作と推定される。福沢より1～2世代前の人名が多く、「服部五郎兵衛」「島津祐太郎」「小幡文治郎」（小幡孫兵衛、小幡篤次郎義兄）「浜野寛蔵」（浜野定四郎父）「奥平上総」（雨山達也父）の人名が確認できる。今回は福沢に関係する人名については、小幡文治郎を小幡篤次郎というように、家系を確認の上、関係性の強い人物名に変更を行った。また、下士の住居は狭く、全ての人名を記載すると煩雑になることから、福沢に関連する人物のみ記載した。中上川彦次郎・和田豊治などの福沢門下や、中村術平・増田宋太郎・小田部武などの親類を中心に選定し、こちらも人名変更を行った。加えて、井口三蔵や下村百兵衛という人物も記載したが、これらは『福翁自伝』等でエピソードが残る人物である。町歩きを楽しめるよう、寺社や史跡だけではなく『福翁自伝』の内容も、マップで紹介した。

再生古地図作成作業の中で、特に注力したのは道幅の再現である。『旧藩情』にも記されるように、上士・下士は居住区間を区別し、言葉遣いや生活文化も差別化された。住居にも格差が現れ、敷地の広狭だけでなく、作りにも違いがあり、下士住居には式台（玄関口の板敷）や門構を作るとは許可されなかった。この格差は主に使用する道幅まで及び、下士居住区間の道幅は上士のものと比較すると、格段に小さいものであった。その道幅はいくつか現存しており、特に福沢旧居・福沢記念館前の道がほぼそのまま残っている。

現在、中津市歴史博物館や新中津市学校がある中津城近辺と比べると、違いを体感することができる。再生古地図作成の際は、道幅の違いがわかるよう、修正を行なった。また再



【「中津城下絵図」福沢旧居近辺】

生古地図を見ると、上士・下士の居住区間がはっきりと分かれており、上士は中津城周辺に多く置かれ、金谷武家屋敷など下士は関所付近に多く居住していたことがわかる。金谷口に入る角には黒瀬家が住んだが、黒瀬家は長篠合戦来の古い家柄で、要所に信頼のおける臣下を置いたと推測される。「中津城下絵図」でもこうした作りは確認できるが、再生古地図となったことで、よりわかりやすく見る事ができる。

また、中津城北東には江戸・大阪を行き来する船が着く御船寄があり、周辺は港町として栄えていた。中津城近くにも蔵米などの船荷を運び込む運上場が築かれ、近隣には天領・日田から運ばれた米などを貯蔵する日田御蔵が置かれた。耶馬溪からの材木は筏によって川を下り、絵図内鉄砲場付近で降ろされ「渡守口」から間屋や醸造家が並ぶ諸町へと運び込まれた。「中津城下絵図」は士族階級及び寺社のみ書かれ、商工業者については記されていないが、中津は交通の要所として産業が栄えた町でもある。再生古地図では、諸町や豊後町といった、商人や職人で栄えた町の紹介のほか、現在も建物が残る間屋「宇野屋」（現・南部まちなみ交流館）や醤油醸造の「室屋」を書き入れた。加えて運上場や呉服・兵庫屋の古写真を掲載することで、



【運上場写真】

中津の産業にもスポットライトを当てた。しかし4月に行われた関係者向けの町歩きイベントでも、産業に関する記述の充実が改善点として上がるなど、まだまだ課題が残る部分である。福沢門下が紡績業を中心に中津の近代化に貢献したことを踏まえ、産業については今後改善したいと考えている。最後になるが、監修くださった山内慶太常任理事をはじめ、関係各位に深く感謝したい。



近代日本医学の黎明期を支えた 先人たちの志を知る

学校法人北里研究所北里柴三郎記念博物館
医学博士

森 孝 之

2024年7月3日に北里柴三郎を肖像とした新千円札が発行されます。この機会に合わせ学校法人北里研究所は、北里研究所創立110周年・北里大学創立60周年記念事業と連動させ新日本銀行券発行記念フォーラム110×60を開催いたします。近代日本医学の礎を築いた学祖北里柴三郎の功績を顕彰すると共に本法人・大学の社会的責務を再確認する好機でもあります。法人運営に対するご理解が深まれば幸いです。

一万円札の渋沢栄一、五千円札の津田梅子、そして千円札の北里柴三郎は、「日本の近代化に貢献した文化人であること」「品格があり国民によく知られていること」そして「精密な写真や絵が保存されていること」などの肖像採用条件に適い採用されました。

私共、北里柴三郎記念博物館でも2024年に特別展を企画しております。既に本法人は去年の6月に第1回目、11月に第2回目と当該フォーラム110×60を開催しておりますが記念博物館も連携を取りながら特別展を実施いたしました。北里柴三郎考案の嫌気性菌培養装置や実験動物用固定器、細菌ろ過装置、そして顕微鏡などの実物展示や解説パネルを含む常設展示に加え特別コーナーでは企画内容に合わせ約20点の写真・ワクチン瓶・文献等を展示しました。第1回目は「北里柴三郎博士特別展—未来への挑戦、原点は北里柴三郎—」、開催期間6月13日(水)～10月31日(火)。主要展示品は『医道論』の原稿です。北里柴三郎は東京大学医学部在学中に『医道論』を発表し「病を未発に防ぐこと」が伝染病対策の第一歩であると説いています。その直筆原稿を展示しました。第2回目は「北里柴三郎博士特別展第2弾—感染症の撲滅に向けた実践—」、開催期間11月5日(日)～2024年2月29日(木)。「伝染病予防法案」の原文を展示しました。1897年、新たな法律『伝染病予防法』の制定に尽力した北里柴三郎は「治療医学と予防医学は人類の福祉を増進する車の両輪である」と提唱し予防医学の充実を図りました。また、北里研究所病院の原点となった結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」の入院患者用献立表から代表的なメニューを食品サンプル模型で再現しました。

さて、正式名称は学校法人北里研究所北里柴三郎記念博物館と称します。本年、2024年3月25日に東京都教育委員会より「博物館に相当する施設の指定通知書」を受け取りました。指定博物館としての役割を果たす所存です。時を遡れば1997年社団法人北里研究所北里柴三郎記念室、そして2008年学校法人北里研究所北里柴三

郎記念室と組織名が改称されてまいりました。所蔵資料は10,000点を超え定期的に展示替えを実施しています。主要な活動としては資料の収集・保管・保全・展示ならびに調査研究が挙げられますが、本学学生に対する講義や外部からの依頼講演にも対応しており、2023年度は7件の出張講演を致しました。活動の一つには講義名「北里の世界」という自校史教育があります。教職員・学生が本法人の使命と建学の精神を学び育む上での中心的役割を担います。「いのちを尊び、生命の真理を探究し、実学の精神をもって社会に貢献する」、これは学校法人北里研究所の理念です。そしてもう一つ、これは社会に対して日本の近代化に尽力した医学者たちを学ぶ機会と場を提供し、医学史の研究拠点としての機能を果たすことにあります。

医学者・北里柴三郎を縦軸に、彼の恩師・恩人・友人たち(マンスフェルト、ローベルト・コッホ、長与専斎、森村市左衛門、後藤新平)を横軸にして明治・大正・昭和へと続く伝染病との戦いの経緯を調査研究しております。また展示室では原稿・書簡などの一次資料や図書、実験器具や写真映像などの展示を以て幅広い年齢層に満足いただけるよう心掛けています。タッチパネル方式の資料閲覧や資料検索コーナーなどもあります。展示室内に掲げられた大きな写真パネルを見て頂ければきっと彼らの時代を感じ取ることが出来ると思います。北里柴三郎たちは実際、そこで何を見て、どのように対処したのか。フランスのルイ・パスツールやドイツのローベルト・コッホの研究手法に基づき衛生環境と病毒の関連性に科学的メスを入れた北里柴三郎。猛威を振るう伝染病と生活環境や労働環境などとの因果関係を解明し劣悪な環境の改善を求めたのです。記念博物館所蔵の資料や文献などを通して感染者隔離、感染地域への交通遮断、病毒に対する消毒、入院治療、予防注射等を実践していたことが分かります。行政の拘束力を得ながら国全体で伝染病の撲滅を目指したのです。例えば、衛生観念啓発ポスターは病毒を媒介するノミ、ハエやネズミを駆除し清潔な暮らしの重要性を教えています。そして別のポスターでは、きれいに見える飲み水でも微生物が混入している恐れがあると注意喚起しています。また、一般市民に伝染病に関する基本的知識を教授するために簡単平易な家庭の医学書なども発行しました。「国家国民が衛生に関する意識を向上させねば伝染病対策の効果は望めない」と考えていたのです。医学博士北里柴三郎述『傳染病豫

『防撲滅法』という医学書が1911年、東京家庭之衛生社から発行されています。「衛生的知識に乏しきは文明人の恥辱なり」との一文から始まります。実際に手に取って読んでみると衛生状態や病毒のまん延状況そして消毒法等が詳細に記載されています。当時の人々にとっては安心と安全を確保できる一冊であったと思われます。

ここで少し話題を変えて全世界がコロナ禍で騒然とした2020年の様子についてお話したいと思います。新型コロナウイルス感染症対策として緊急事態宣言、まん延防止等重点措置が発出された時、当記念博物館は見学者の感染防止対策として展示室を閉室しました。コロナ禍に関連して感染症に対する危機感が社会全体に広がり、マスメディアが人類と感染症との戦いの歴史にスポットを当て始めていました。その結果、約120年前の日本で伝染病研究を牽引してきた北里柴三郎の功績に関する問い合わせも多くなりました。一方では2019年の新札幌像決定の報道を契機に北里柴三郎への関心が高まりつつある中で新たな感染症の出現だったのです。2020年3月11日、WHOが新型コロナウイルス感染症のパンデミックを宣言しました。国内でも緊急事態宣言が発出されるという状況になり、マスクは入手困難、3密を避ける、など諸々の対策が取られました。その時に報道関連の取材に答える形で提供したのが図1に示す『結核退治絵解』（1913年制作）です。手洗いうがい、そして感染者との接触を避けるといった基本的防衛手段が推奨されていたのです。有効な薬剤・ワクチンが提供されない状況下では衛生、静養、栄養が重要であると絵解図は説いています。



図1 結核退治絵解（1913年制作）

北里柴三郎は明治・大正・昭和に活躍した細菌学者です。当時、コレラ・赤痢・腸チフス・痘瘡などにより毎年、数万人が亡くなっており公衆衛生の立ち遅れは伝染病まん延の一因であると警鐘を鳴らしていました。「衛生インフラの整備状況と伝染病の感染拡大には関連性がある」、これは北里柴三郎の衛生的国家構築上の基本的概念です。研究拠点となる施設として1892年に日本初の私立伝染病研究所が開設されました。この時に絶大な支援を惜しまず物心両面で支えてくれたのが福沢諭吉でした。翌年には結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を設立しその運営は北里柴三郎に託されました。実はこの養生園の蓄財によって後年、国立伝染病研究所を辞職した北里柴三郎は1914年、北里研究所を創設することが出来たのです。福沢諭吉の支援により日本の伝染病研究が飛躍的に向上したのです。北里柴三郎は福沢諭吉に対する報恩の証として1917年開校の慶應義塾大学部医学科の初代医学科長に就任したのです。

以上、北里柴三郎記念博物館に関係するお話をさせていただきましたが、感染症の歴史を辿ると思わぬ人物の事績に遭遇します。1665年、ロンドンでまん延するペスト（黒死病）を避け生まれ故郷に疎開していたアイザック・ニュートンは木から落ちるリンゴを見て万有引力の法則を発見したという逸話があります。その彼は1676年「私が遠くまで見通せたのは、巨人たちの肩に立っていたからだ」との言葉を残しています。原典は12世紀のフランス哲学者・シャルトルのペルナルとされています。先人の功績に敬意を表すると共に、そこから如何に新たな真実を見出すか。科学研究の継続性が重要であるとしてニュートンはこの言葉を引用したのです。巨人とはガリレオでありケプラーです。多くの巨人たちの、つまり多くの先人の多様な視点や価値判断、そして積み重ねた研究・発見により、新たな発見がなされるのだと解釈することができます。一つの発見が更なる新たな発見に繋がる、あるいは発見の足掛かりになることを現代に生きる我々に伝えています。これは飛躍過ぎるかもしれませんが、その「巨人たちの肩」の役目を担うのが歴史的資料を保管展示する博物館ではないでしょうか。19世紀中頃から20世紀前半にかけて北里柴三郎たちが行った医療改革や研究業績が現在の医学医療の発展に繋がっていると考えています。

最後になりましたが、北里柴三郎記念博物館は東京都港区にあります「港区ミュージアムネットワーク」に加盟し教育的・文化的活動を通して、博物館の更なる機能向上に努めております。



チケットから見る学生野球史

福沢研究センター調査員 酒井 俊 輔
慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程

福沢研究センターでは、令和4～5年度にかけて、昭和戦前期の東京六大学野球を中心とした学生野球の数多くのチケットを新収資料として収蔵した。その数は263枚に及ぶ（複写も含めると479枚）。

六大学野球は、大正14年（1925）に開始され、翌年の明治神宮野球場完成、昭和3年（1928）のラジオ中継開始もあり爆発的人気を博するようになる。チケットには年が書かれていない場合があり、いくつかの年代推定のポイントがある。まず「連盟」の名称である。初期のチケットには「六大学野球聯盟」との文字が見える。当時は、唯一の「六大学」と名のつく連盟だったので、「東京」を冠する必要がなかったのである。

ところがこの文字は、昭和8年（1933）春から「東京大学野球聯盟」へと変化する。これは、昭和7年の早稲田の連盟脱退の影響である。早稲田は同年5月、「純真な学生スポーツを守る立場から興行化した連盟を脱退する」と通告し、リーグを脱退した。当時の六大学野球は、人気の過熱により、行き過ぎた応援や乱闘、入場料収入の不透明などが問題になっていた。特に、昭和6年の慶明第2回戦で明大が起こした「八十川ボーク事件」は社会に大きな失望をもたらした。早稲田の脱退の前月には、いわゆる「野球統制令」が文部省から発せられた。そしてこの統制令が結局、戦時下の野球弾圧、そして連盟解散をもたらす。早稲田は1シーズン不在後（この年は1シーズン制）、翌年から復帰したが、その名残で「東京大学野球聯盟」の名称は以後も引き継がれた。なお戦後は「東京六大学野球連盟」となる。

さらに昭和5年以降のチケットは、色が試合ごとに変わっていたり、透かしが入ったりしている。人気加熱でダフ屋も横行したため、偽造防止をせざるを得なかったのだろう。また昭和5年のチケット上部にはアルファベットの記号がある。4文字の場合、1文字目はS（Spring＝春季）かA（Autumn＝秋季）。2、3文字目は、KWMHRTの6文字のうちの2つで、対戦校を示す。4文字目は、A～Dで、Aは第1回戦内野、Bは同外野、Cは第2回戦内野、Dは同外野を示し、試合の特定が可能である。しかし「AAAF」「AABFB」など5文字の記号も見られ、これらの意味は不明である。

年代推定の他のポイントは、チケットに捺された印である。例えば、昭和14年秋の早慶戦のチケットには、「正力」という印が押されており、当時野球部マネージャーの正力亨（後の読売巨人軍球団オーナー）である。「慶應大学」や「慶應義塾大学体育会野球部」の印の場合もある。いずれの場合も、チケットの偽造防止や招待券の有効性を示すものであろう。

やがて国際情勢から野球を「敵性スポーツ」として排

斥する機運に関連する変化として、野球が武道であることを強調し、規律を重視する姿勢をみせる一文がチケットに見られるようになる。昭和14年秋以降は、裏面に「学生運動競技ノ精神ヲ認識シテ互ニ道場ノ神聖ヲ守リマセウ」との注意書きがあるのがそれである。野球を武道の一環と見なし、球場は「道場」と見なされた。実際、早稲田では昭和16年に戸塚球場を「戸塚道場」と改称した（慶應は最後まで下田球場と呼んだ）。昭和18年春に、ついに文部省は連盟解散を命じる。このため昭和17年秋を最後にチケットは途切れる。

現物は確認されていないが、笠原和夫・松尾俊治編『学徒出陣最後の早慶戦』（1981年）の口絵には、昭和18年10月16日の「最後の早慶戦」のチケット画像がある。この試合は当センターと早稲田大学大学史資料センターの共著『1943年晩秋 最後の早慶戦』（2008年）が解明したように、対校試合（練習試合）として強行され、観客は関係者限定、無料で、一般観客は入れず、場外に溢れた。このチケットには、日時や場所もなく、当時のマネージャー「片桐（潤三）」の薄い印が見える。

戦争が終わり、六大学が復活するのは、昭和21年春季リーグ戦からである。「東京六大学野球連盟」に改称されての再出発で、神宮球場はGHQの接收中、上井草や後楽園での開催となり、かつ試合自体も一本勝負の5試合制であった。この時期のチケットは、紙質が悪く、もぎるミシン目すら不明瞭である。紙の質は昭和21年秋、22年春、秋と、グラデーション的に改善していく。

以上のように、チケットを丹念に眺めて野球史と対照すると、当時の時代背景や生活事情、戦争との関連などが明確に浮き上がる。同時に、野球チケットにも資料としての魅力が十二分に詰まっていると感じられる。

なお、この度当センターの野球チケット収集にご協力いただいた山岸茂幸氏（Xアカウント「野球チケット博物館」運営）には、厚く御礼申し上げたい。



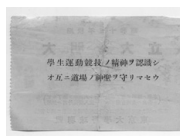
昭和5年秋



昭和8年秋



昭和14年秋



昭和15年秋裏面



昭和18年「最後の早慶戦」



昭和21年春

新収資料紹介

令和5年10月から令和6年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。すべての資料をご紹介しますが、この場をお借りして御礼申し上げます。

■ 福沢諭吉書幅 一面真相一面空 1幅

【寄贈】

『福翁百話』刊行に際して詠まれた七言絶句。人生は小児の戯れのようなものであるが、戯れと知りながらまじめに世渡りすることが人生のあり方であるとの意。平河由美子様より寄贈された。寄贈者の曾祖父である吉田丹次兵衛は、「散歩党」を通じて福沢と関係を深め、その縁もありこの書幅が贈られた。吉田は後に日出銀行頭取、総武銀行取締役、千葉合同銀行の取締役などを歴任した。

■ 堀田瑞松宛福沢諭吉書簡 明治18、9年(1885、6)カ2月19日付 1巻

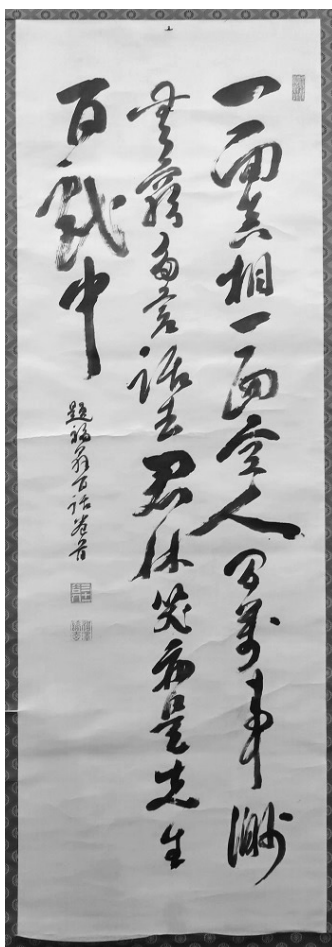
【寄贈】

時事新報社が手狭となり困窮していたために、隣家で堀田瑞松が営む漆屋の譲渡を交渉する書簡。堀田は、彫刻家・漆工芸家として著名な人物で、「堀田錆止塗料及び其塗法」で日本における特許第1号を取得したことでも知られる。封筒に消印等はない。『福沢諭吉書簡集』第5巻刊行時には校訂ができていなかった。堀田の子孫の沼島一郎様より寄贈された。

■ 福沢諭吉草稿 死富ノ論 1巻

【購入】

明治10年(1877)2月に書かれた「死富ノ論」の草稿。「死富ノ論」は、『福沢文集』1編巻之2にも収録されている。内容は、『家庭叢談』45号に書かれた「富ノ勢力ヲ論ズ」に補足する形で、金銭を蓄えずに流通させることを奨めるもの。「死富」は「富アリテ活力ナキモノ」を示す福沢の造語。



一面真相一面空

■ 北里柴三郎書 医道論 1幅

【購入】

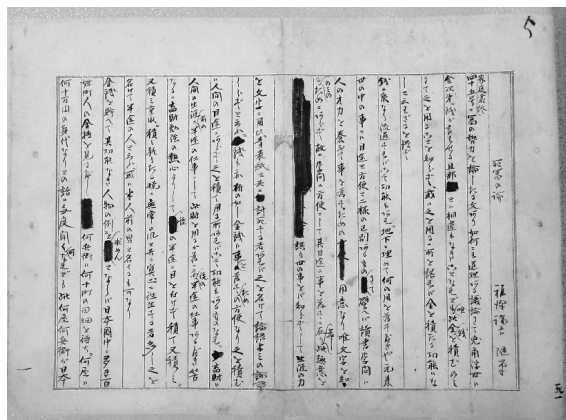
北里柴三郎が東京医学校時代の明治11年(1878)に草した演説原稿「医道論」の末尾に記した漢詩を、後年大書した書。北里の書は非常に少なく、従来当センターには1点も所蔵されていなかった。近年柴三郎の子である北里文太郎関係資料が多く古書市場に現れており、この書も文太郎旧蔵と考えられる。文太郎は昭和16年12月医学部卒業。医史学を専攻したが、昭和19年に戦死した。表紙参照。

■ 梶原可吉関係資料

【寄贈】

梶原可吉宛小泉信三書簡、阿部章蔵書簡など計92点。梶原は小泉や阿部の親友で、水上瀧太郎(=阿部の筆名)の小説『大阪の宿』には、梶原がモデルの一人として登場する。梶原の孫の佐藤健二様より寄贈された。

(文責：酒井俊輔)



死富ノ論

主な動き

■『小幡篤次郎著作集』刊行および刊行記念公開講座

小幡篤次郎著作集は、英氏経済論を収録した第3巻を10月25日、小学歴史、小学地誌階梯、諸文集などを収録した第4巻を3月30日に刊行した。著作集刊行に合わせて行われた福沢諭吉協会と共催の公開講座「小幡篤次郎の再発見」を春学期の2回に続き、秋学期も3回開催した。第3回10月14日(土)は客員所員の平石直昭氏「『文明論之概略』と小幡篤次郎」、第4回11月18日(土)は編集委員の船木恵子氏「小幡篤次郎訳『彌児氏宗教三論』と19世紀イングランド」、第5回12月16日(土)は所員の池田幸弘君「英学者としての小幡篤次郎」が東館で行なわれ、活発な議論が交わされた。



■ 中津市の行事等への参加

新中津市学校の市民講座は、秋も11月25日(土)に、客員所員の川崎勝氏と所員の久保健晴君の講演「明六社—学術・学者との関りから見る福沢諭吉」が開催された。12月8日(金)第62回全国高等学校弁論大会の審査員には、所員の小川原正道君が派遣され、審査と講演を行なった。また、2月3日(土)福沢旧邸保存会による第124回忌法要時記念講演会には客員所員の加藤三明君が講演を行なった。

■ 慶應大阪シティキャンパスにおけるセンター講座

恒例となったセンター講座が12月から3月にかけての土曜日、「関西の福沢山脈—生誕150年・小林一三をめぐる—」と題して、対面およびオンラインのハイブリッド形式で計4回にわたって開催された。

第1回12月2日は所長の平野隆君「小林一三と郊外型

ライフスタイルの創造」、第2回1月13日は仙海義之氏(阪急文化財団)「小林一三が実践した、福沢諭吉の独立自尊・西洋事情・男女平等」、第3回2月10日は宮井肖佳氏(阪急文化財団)「慶應出身の文化人たち—小林一三との交流から見える文化ネットワーク—」、第4回3月30日は、顧問の小室正紀君「福沢諭吉から見た小林一三」が開催され、延べ230名以上の参加者があり、質疑も活発にかわされた。



■ 学内共催事業

3月2日(土)、70周年の落語研究会との共催で、三田演説館において落語名人会を開催した。第一部では平野隆所長の挨拶や、落研OBの池井優名誉教授を中心に座談会があり、第二部では落研4年生4人を中心とした名人会が開かれた。多くの来客があり、笑いのうちに終了した。翌3月3日(日)は教職課程センター研究交流・懇親会「『社会における教師』の過去・現在・未来—慶應義塾と教師教育—」が西校舎519教室で、zoom同時配信のハイブリッド形式で行なわれた。当センター元所長でもある米山光儀名誉教授(現センター顧問)を囲むシンポジウムということもあり、当センター共催で開催され、西沢直子君から提示された3つの観点のうちの1つ「福沢研究の観点から」の報告を行い、活発な議論が行われた。

■ 諸会議

- *2023年度執行委員会（10月5日、11月2日、12月5日、1月11日、3月18日）
- *2023年度第2回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議（1月15日）
- *2023年度福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会（11月2日、3月5日）
- *『小幡篤次郎著作集』編集委員会（12月18日）
- *『近代日本研究』第41巻編集委員会（3月27日）

■ 人事

- <客員所員> 新任 山尾忠弘 11月1日～
- 新任 金文京 11月1日～
- <事務局> 新任 董瀟瀟 11月1日～

■ 主な来往

- *豊中市福原氏来訪（10月12日）
- *南開大学劉氏来訪（11月6日）
- *幼稚園舎岩井氏および生徒10名、塾史展示館企画展見学のため来訪（11月14日）
- *中津市長来訪（11月15日）
- *東京農業大学、塾史展示館見学のため来訪（1月12日）
- *岩手県立博物館職員来訪（2月16日）
- *横浜初等部三田見学会のため来訪（2月21日）
- *アメリカ野球殿堂博物館一行来訪（3月29日）

■ 取材対応

- *都倉、朝日新聞（学徒出陣関連、10月10日、日吉キャンパスにて対応）
- *都倉、共同通信（学徒出陣関連、10月20日対応）
- *都倉、NHK（小泉信三関連、10月26、30、31日、12月15、27日対応）
- *都倉、北海道新聞（学徒出陣関連、11月8日対応）
- *読売新聞（企画展関連、11月20日対応）
- *都倉、毎日新聞（展示館紹介関連、12月18日対応）
- *都倉、中央経済社（福沢と渋沢関連、12月22日対応）
- *都倉、日経新聞（西航手帳関連、2月26日対応）

■ 出張・調査

- *都倉、横山、芳賀ライブラリー訪問（10月17日、1月22日）
- *西沢、資料閲覧のため国立教育政策研究所教育図書館訪問（10月19日）
- *都倉、横山、前田祐吉宅訪問（10月23日）
- *西沢、金客員所員、小幡旧蔵資料調査のため中津市出張（10月26日～28日）
- *都倉、横山、目録作成等相談のため上原家訪問（11月6日～7日）
- *都倉、横山、企画展資料調査のため、漫画博物館訪問（11月14日）
- *西沢、資料閲覧のため東書文庫訪問（11月24日、12月1、7、22日）
- *西沢、小幡旧蔵資料調査のため中津出張（12月13～15日）
- *都倉、横山、酒井、藤山一郎遺族宅訪問（1月15日）

■ 講師派遣

- *都倉、早稲田大学広報担当者塾史展示館見学案内（10月12日）
- *都倉、千葉三田会にて講演（10月14日）

* 福沢論吉協会との共催公開講座

- 平石客員所員（10月14日）、池田所員（12月16日）
- *都倉、渋沢栄一記念館にて講演：「福沢論吉と一万円札」（10月22日）
- *都倉、三田書道会塾史展示館見学案内（10月28日）
- *都倉、慶應義塾全国議員連盟にて講演（11月10日）
- *都倉、学生団体Crichにて講演（ZOOM）（11月18日）
- *都倉、小江戸とちぎ会にて講演（11月19日）
- *大久保所員、川崎客員所員、2023新中津市学校市民講座：「明六社—学術・学者との関りから見る福沢論吉」（11月25日）
- *2023年度慶應大阪シティキャンパス（KOCC）にてセンター講座
平野所長（第1回 12月2日）小室顧問（第4回 3月30日）
- *小川原所員、第62回全国高等学校弁論大会（12月8日）（審査と講演）
- *都倉、石橋湛山研究学会にてシンポジウム報告（12月16日）
- *都倉、塾内高校生向け三田キャンパス史跡巡り対応（12月26日）
- *都倉、京都慶應倶楽部にて講演（1月10日）
- *都倉、東京通信三田会55周年記念にて講演（2月10日）
- *都倉、関西三田体育会にて講演（2月17日）
- *都倉、東京理科大学大学史研究会にて講演（2月29日）
- *都倉、学生部主催小国・中津ツアー（3月6～8日）
- *横山、三田教育会にて講演（3月23日）

■ その他

- *都倉、メディアコム会議（10月4日、12月6、13日）
- *港区ミナコレ（スタンプラリー）：オンライン説明会（10月12日）
- *都倉、KeMCo編集委員会（10月19日）
- *山内所員、都倉、無料オンライン講座 Future Learn コース制作への協力 日本の近代化：福沢論吉の格闘（10月30日開講）
Modernization of Japan - The struggle of Fukuzawa Yukichi
- *平野所長、研究所・センター連絡会議（ZOOM）（11月10日）
- *都倉、近代日本の慶應義塾とローカル・リーダー研究会（11月11日、2月25日）
- *西沢、都倉、KeMCo運営委員会（11月22日、12月6日）
- *西沢、メンタリングプログラム（11月27日、12月8日、2月1日、3月28日）
- *西沢、定年制度審議会（12月4日）
- *都倉、美術品管理運用委員会（12月11日）
- *西沢、国際センター運営委員会（12月14日、3月14日）
- *久我、横山、西村、港区ミュージアムネットワーク全体会（北里研究所）（12月14日）
- *都倉、石橋湛山研究学会シンポジウム（12月16日）
- *都倉、七條義夫氏日本高野連育成功労賞祝賀会（1月27日）
- *都倉、港区文化財団保護審議会（1月29日）
- *横山、箱根駅伝資料の優勝時走者子孫来訪対応（1月31日）
- *落語研究会名人会（3月2日）（共催）
- *教職課程センター研究交流・懇親会（3月3日）（共催）
- *平野所長、福沢旧邸保存会理事会（ZOOM・3月12日）
- *平野所長、西沢、新中津市中学校運営委員会（ZOOM・3月26日）
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会（ZOOM、3月28日）

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長	平野 隆	商学部教授
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授
所 員	朝倉 浩一	理工学部教授
(兼運営委員)	池田 幸弘	常任理事、経済学部教授
	武林 亨	医学部教授
	山内 慶太	常任理事、看護医療学部教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授
	大久保健晴	法学部教授
	大久保忠宗	普通部教諭
	大塚 彰	志木高等学校教諭
	小川原正道	法学部教授
	小山 太輝	幼稚舎教諭
	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭
	末木 孝典	高等学校教諭
	中西 聡	経済学部教授
	馬場 国博	横浜初等部長、湘南藤沢中・高教諭
	Millán Martin, Alberto	経済学部准教授
	薮本 将典	法学部准教授
	結城 大佑	普通部教諭
顧問	井奥 成彦	名誉教授
	岩崎 弘	元幼稚舎教諭
	小室 正紀	名誉教授
	坂井 達朗	名誉教授
	松崎 欣一	名誉教諭
	米山 光儀	名誉教授
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授
	飯田 泰三	法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授
	石井寿美世	大東文化大学教授
	石田 幸生	亜細亜大学准教授
	區 建英	新潟国際情報大学教授
	太田 昭子	慶應義塾大学名誉教授
	加藤 三明	慶應義塾名誉教諭
	金沢 裕之	防衛大学校准教授
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授
	川崎 勝	
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	曾野 洋	四天王寺大学教授
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
	戸村 理	東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発室准教授
	平石 直昭	東京大学名誉教授
	平山 洋	静岡県立大学助教

藤原 亮一	田園調布学園大学教授・図書館長
前坊 洋	
松岡 李奈	中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
松沢 弘陽	
松田宏一郎	立教大学教授
三科 仁伸	拓殖大学准教授
宮内 環	慶應義塾大学産業研究所兼任所員
宮村 治雄	
山田 央子	
吉岡 拓	明治学院大学教養教育センター准教授
林 宗元	韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
Saucier, Marion	
Nguyễn thị Hạnh Thực	Ho Chi Minh City University of Technology Lecturer
Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
山尾 忠弘	大阪経済大学講師
金 文京	新村出記念財団業務執行理事

研究嘱託	大庭 裕介	
	加藤 学陽	
	具 知會	東京大学印度哲学仏教学研究室特任研究員
	小林 伸成	
	重田 麻紀	慶應義塾大学文学部古文書室研究員
	白石 大輝	桐蔭横浜大学特任講師
	柄越 祥子	
	巫 碧秀	Silk Road Cities Alliance Secretary General
	堀 和孝	関東学院大学非常勤講師
	山根 秋乃	
	横山 寛	福沢諭吉記念慶應義塾史展示館専門員

事務局	久我 竜二	事務長
	竹屋 早月	主 務
	飯島 典子	事務員
	渋谷 彩佳	事務嘱託
	西村 真由	事務嘱託
	奥山 美樹	事務嘱託
	董 瀟瀟	事務嘱託
	岡部 敏和	非常勤嘱託
	柄越 祥子	非常勤嘱託

他に、『慶應義塾 150 年史資料集』調査員、11 名
(4 月 1 日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第40号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2024 年 4 月 30 日 (年 2 回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
電 話 03-5427-1604
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所